

与右衛門さんは、足をしっかりと踏みしめながら、帰って行きました。お奉行は、与右衛門さんが帰って行くのを見届けてから須卜に会って話をしようと須卜の家へ、やってきました。

吉長「須卜はいるか。話がある。入るぞ。」



お奉行が、家の外で声をかけると

須卜「あつ、お奉行様、

これは、これ

は。あのう、

私に何のご

用でしょうか。」

お奉行が家へ入ろうとすると、須卜は、いきなり刀で切りかかりました。

須卜「やつー」、

お奉行が自分を捕まえに来たと思つたのです。

吉長「何をするか！。無礼者。」

間一髪、危うく身をかわした、お奉行は、須卜の手から刀をたたき落とすと、腕を取り、ねじ伏せて近くにあつた縄で、縛りあげてしまいました。

吉長「須卜よ、お前は、人が嫌がることや悪いことばかりをして、みんなに迷惑をかけ、嫌われている

ことがわからぬか。今度は、大雨の被害で困っている農民に『ここを出て、よそへ行け』と、けしかけているのではないか。今は、どこへ行つても、暮らしは変わらぬ。それがわからぬか。」

身体を柱に縛られて動けない須卜に話しかけました。

⑥ 須卜「この雨で米が取れず、飢え死にする農民をお奉行は救うこ

とが出来たのか。」

須卜は、柱にしばられたままでお奉行をにらみつけるようにして言い返しました。

吉長「農民や、村人の命を守るのは奉行の責任だ。みんなが食べる米は

大洲藩が全力をあげて、よそから買い集める。だから絶対に、飢え死にをさせるようなことはしな

い。」

須卜「年貢を取り立てるだけのお奉行に、そんなことが出来るものか。」

吉長「だまれ。もう、お前の言うことなどを聞くものは、だれもおらぬ。わしも、もうこれ以上、おま

えにかかわつてなど、おれぬ。」

その時、物陰から見えていた須卜の妻が、長い棒でおそいかかりました。

須卜の妻「えいつ、」

吉長「あつ、なにをする！」

声と同時に、お奉行は、ひよいと身をかかわして、棒を引っ張ると、妻



はすかされ、かべに突き当たつて気を失い、倒れてしまいました。ちようど、その時、奉行所から役人たちが駆

けつけてきました。

奉行所役人「お奉行、大丈夫ですか、おかげがありますか。与右衛門

さんから、須卜の家へ向かわれたと聞き、急いで来ました。しかし、

すごい雨で遅くなりました。」

吉長「私は大丈夫だ、それよりもこの須卜たちを奉行所へ連れて行

け。」

役人たちが須卜夫婦を連れていくのを見届けてからお奉行は、もう何もなかったような顔をして奉行所へ帰りました。

⑦ その夜、おじいさんは今日の出

来事を、おばあさんと与右衛門さんに、話しました。

吉長「与右衛門、お前も水に沈んでいる田んぼを見て回つたが、どのように思つたか。」

与右衛門「はい、この雨で、もしお

米が取れなければ、皆さんが心配していたように生きていけないのですね、どうなるのですか。」



吉長「そうだ、もしも大きなききん(日照りや水害で米などが取れないこと)が起れば、

農民たちは食べ物なくなり、生きられず、ここを逃げ出すことになる。そのようなことが起こらぬように、困っている時は、何としても助けなければいけないのだ。そこで、みんながこの土地で、安心して暮らせるように守るのが、奉行や侍の仕事だ。だから、須卜のように世の中を乱そうとする者は命をかけてでも防がなければならないのだぞ。」

与右衛門「はい、おじいさんの言われたことをしっかりと覚えておきます。でも、須卜はどうなるのですか。」

吉長「須卜が『悪かつた』と心からあやまれば、許してやろうと思う。しかし、与右衛門。今日の事件で須卜の仲間たちが、助けようとして、押しかけて来るかもしれない。お前も、もう十三才だ。奉行所の者といつしよに、しっかりと見張りをしなさい。」